湯の誉れ　～私、立ち寄り湯でして。～

春まだ暗い夜、月が照らす露天の湯。

こんこんと湧き続ける、人々が癒しを求める立ち寄り湯のお話です。

はじめまして、私、立ち寄り湯と申します。日が昇っている間は人々を癒やすのが生きがいなのですが、夜は誰にも入ってもらえません。肌寒さより、心の寂しさが沁みる時間ですね。実は私、こう見えて寂しがり屋でして。人々の足音も消え、ひと吹きの夜風がほんのり硫黄の匂いを運び、湯面には月の光だけがそっと溶け込んできます。世界に一人ぼっちになったような感覚に包まれるのです。

だから毎晩、月に語りかけています。

「今夜も、誰も来ないね。月さん、私の話を聞いてくれる？」

もちろん返事はありません。それでも、語りかけると胸の内が少し温まります。ふふ、湯の温度は変わりませんけどね。

でも今夜は、こうしてあなたと巡り会えました。私の話を、聞いていただけますか？

暗い夜には、お昼の情景がふと思い出されます。たとえば温泉で作った、あのとろける湯豆腐の香りが風に乗って届き、誰かが「滋味深い優しい味だ」と呟くのが聞こえると、私にも一口……あっ、失礼しました。つい心の声が漏れましたね。

ほかにも、季節限定になるのですが、地元の名茶を入れていただき、お茶風呂になる日があります。湯面がほんのり緑がかり、湯気まで新茶の香りで。浸かった方が「あぁ、いい香り」と目を細めるたび、私まで誇らしくなります。ただ、香りに釣られて子供が飲もうとすると、湯としてはかなり焦ります。私、淹れたてのお茶ではなく……そもそも飲み物ではないのです。

夜も深まると、話したいことがどんどん溢れてきて、どれを話したらいいかわからなくなります。えっと、次は……そうそう、夕方のことでした。

日が傾く頃、私は湯面に黄金色を映します。「湯」の暖簾をくぐる人影が絶えません。ドライブ帰りの家族、ハイキング帰りのカップル、冒険心あふれる旅人。

そういえば、この時間になると思い出す老夫婦がいます。毎年、夕暮れどきに来てくれました。湯の縁に腰掛け、手ぬぐいを頭に乗せて「今年も来ちゃっ

たよ」と笑う、春風のような方達でした。笑い声が湯面に優しく揺れて、もう何年もお二人一緒でした。

しかし今年は、おじいさんが一人でお見えになりました。背中がいつもより小さく見えましたが、それでも声をかけてくれたのです。

「今年が最後になるかもな」

湯気に紛れるような呟きが、今も私の中に残っています。

でも私は、来年もきっと会えると信じて待っています。夕暮れの湯の中に、二人の足音が聞こえる気がするから。あの笑い声が、風に乗って戻ってきてくれる気がするから。

少ししんみりしちゃいましたね。でも、悔しかった話もあるんです。

ある日、都会から温泉ソムリエという高慢な方が来て、私に浸かるなり「自宅の風呂と変わらん」と吐き捨て、有名な旅行サイトで酷評したのです。聞いたときは、滝のような涙を流すところでした。湯なので涙は出ませんけどね。でも滝ではなく、打たせ湯ならありますので、ぜひご利用ください。

おっと、話が逸れましたね。それでどうなったかというと、酷評に気づいた地元の方々が声を上げてくれて、数日後、ソムリエさんは酷評を取り消し、「トロトロの泉質で美肌になれる名湯」と手のひらを返して宣伝し始めました。

人の心というのは、湯気よりも形が定まらないものかもしれませんね。

―あら？

話に夢中になっているうちに、湯気の向こうが白み始めました。月が霞んで、空がほんのり色づいて。あぁ……夜明けが近づいてきたようです。

まだ話し足りないのに。これが可惜夜というものでしょうか。

……もう少しだけ、朝日が届くまでの間だけでも、お話ししてもよろしいでしょうか。

私は、地元の人達に美肌の湯と呼ばれて親しまれております。肌をやわらかく包み、心まで解きほぐす湯と。

もしあなたがいつかこの地を訪れることがあれば、ほんの少しでも私を思い出して、顔を見せてくださると嬉しいです。あなたを湯の中にお迎えして、息がゆっくりほどけていくのを、湯気越しに見つめながら、ぬくもりで応えます。

その瞬間を分かち合えることこそが、私にとっての「湯の誉れ」なのです。

素敵な時間を、共に過ごしませんか。直接、言葉を交わすことはできませんが、ぬくもりでなら、きっと伝えられると思うのです。